鎌倉女子大学紀要　第14号　103-110頁　2007年3月
The Journal of Kamakura Women's University, No.14, pp.103-110, March 2007

原著論文

源氏物語　宇治の自然描写と薫の心情

柴村　抄織（児童学科・講師）

和文要旨

源氏物語の宇治の自然描写は、登場人物の心情と関連している。都と宇治の環境の違い、宇治の姉妹との人間関係、描写される音楽から、薫の精神的探求を述べる。

キーワード

源氏物語・宇治・描写

序

源氏物語は、第一部が光源氏の超越性と予言の実現の過程と結果、第二部が光源氏の栄華と凋落である。物語の主人公として全ての美質を兼ね備えた光源氏の都での政権、栄華の追求、その結果である六条院、そして、六条院の秩序・調和が崩壊に至る。現世での身分や政治力、地位などの栄華、愛情も絶対ではなかった。光源氏は、父親の桐壺帝以外で政権の後盾となる貴族もなく、皇子に生まれながら、臣籍に下り、右大臣派閥との政治的抗争があり、須磨流謫、都に戻っては政権をとる人物となり、准太上天皇となる。その後、女三の宮との結婚で、最愛の紫の上との隔絶、その後、紫の上を失うことになる。第二部は、予言の実現ではなく、物語には読者に訴えたいことがあって語るものである、という紫式部の信念が出ている。また、第一部では、主人公光源氏の超越性が語られたが、第二部では、より人間らしさが出てきて、功罪を含めた憂愁のある人物として描かれている。

このように、第一部第二部の主人公である光源氏は、生まれながらの美質と宿命、後に得た政治力によって、政権をとり、人より優れた栄華の人生を手にすることができ、その過程が描かれたが、第三部の主人公である薫は、光源氏の子として、始めから現世での身分や政治力、地位を既に約束されている人物である。光源氏によって、栄華とその凋落というひと通りの主題を完成させた後、宇治を舞台に、薫を主人公として、紫式部が訴えたかった主題を考察する。

第三部の宇治の自然描写と薫の心情について、薫の道心、薫の独詠歌の場面、八の宮から姉妹へ継承された音楽、姉妹の描写を中心に述べる。

薫の道心

道心を持つ薫は、法の友として、八の宮と出会った。皇太子候補でありながら、山深い場所に隠棲する点が、伊勢物語の不遇の親王として語られる、惟喬親王との類似が見られ、都（俗）に対して宇治（聖）という概念が見出される。

a【橋姫巻　一二〇頁】(1)

宰相中将（薫）も、御前にさぶらひたまひて、我こそ、世の中を

ばいとすさまじう思ひ知りながら、行ひなど人に目とどめらるばかりは勤めず、口惜しくて過ぐし来れと人知れず思ひつつ、俗ながら聖になりたまふ心の掟やいかにと、耳とどめて聞きたまふ。

父光源氏の弟である八の宮は、娘に皇女のような戒めを授けて養育していた。薫は、叔父としてではなく、高貴な身分であった人間が、都からみれば荒々しい自然環境の宇治で、娘の養育という俗と聖心とを調和させていることに強く関心を持つ。薫自身、都で冷泉院の信頼を受け、十九歳にして宰相中将という地位についていた。しかし、その心の内は、深い悩みを抱えている。

薫の心情表現、「我こそ」にこれまでの薫の強い感情が読み取れる。源氏物語の係助詞「こそ」は、二つの特性(2)があり、それは、以下のとおりである。(イ)「こそ」で強調されるものの他に、同類の対比項があること。(ロ)それと対比した上で、「こそ」と強調している方を選りすぐり、取り立てること。薫は、八の宮と自己の道心を対比して、俗世にいながらにして、聖を求めるという共通のものがありながら、自己がやり遂げていないことを強く考えている。宇治の大きな主題が〈救済〉であるなら、薫が追求したものが〈救済〉のなかで、どのような意味を持つのか叙述をみてゆく。

宇治の自然描写と薫の独詠歌

八の宮との親交は、三年の月日が流れた。都では経験できない、俗世間と離れた宇治での生活である。道心で八の宮と共感していた薫は、晩秋、八の宮不在の山荘を訪れる。

b【橋姫巻　一二七頁～一二八頁】

有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて、いと忍びて、御供に人などもなく、やつれておはしけり。

川のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり。入りもてゆくままに霧ふたがりて、道も見えぬしげ木の中を分けたまふに、いと荒ましき風の競ひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるもいと冷やかに、人やりならずいたく濡れたまひぬ。かかる歩きなども、をさをさならひたまはぬ心地に、心細くをかしく思されけり。

A　山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろきわが涙かな

山がつのおどろくもうるさしとて、随身の音もせさせたまはず。柴の籬を分けつつ、そこはかとなき水の流れどもを踏みしだく駒の足音も、なほ、忍びてと用意したまへるに、隠れなき御匂ひぞ、風に従ひて、主知らぬ香とおどろく寝覚めの家々ありける。

この場面は、主人公の薫が、自己の内面の深い悩みを抱えて、宇治の地に分け入る場面である。共感する相手であった八の宮の不在で、薫は自己の内面と向き合うことになる。また、傍線部分の宇治の自然描写は、霧でふさがり、道もみえない状況は、薫の自己の内面を表現し、自らの意思で「(山路に)入りもてゆくままに」→「霧」→「茂木」→「籬」と徐々に柔らかいものから形のある困難なものへ分け入るようにして描かれている。宇治の自然描写が主人公薫の心情と過程とを表現し、豊かな感覚的な描写である。情景と心情とが一致し、独詠歌に向かって収斂している。

薫の独詠歌の和歌Aは、宇治の自然の露と比較して、自分でもこれまで意識しなかった「涙」、人生における〈空虚さ〉が薫自身に意識されてくる。都では、高い身分や地位を既に持っている薫は、宇治の聖なる環境で、自らの意思や追求しているものを意識し始める。

この場面は、薫の精神的探求の始まりといってよい、と考えられる。

八の宮から姉妹へ継承された音楽

琴の名手である八の宮は、娘に音楽を授けていた。

c【橋姫巻　一二一頁】

さすがに物の音めづる阿闍梨にて、「げに、はた、この姫君たちの琴弾き合はせて遊びたまへる、川波に競ひて聞こえはべるは、いとおもしろく、極楽思ひやられはべるや」と古代にめづれば、

『花鳥余情』の注に「極楽の歌舞の菩薩の事をいへるなり」とあるように、姉妹の音楽は、宇治の自然環境の音と相乗効果で、阿闍梨の耳には、極楽を想像させる音楽に聞えた。このことは、次の場面で実際にその音楽を聞いた薫の心情が描かれている。

d【橋姫巻　一二九頁】

近くなるほどに、その琴とも聞きわかれぬ物の音ども、いとすごげに聞こゆ。「常にかく遊びたまふと聞くを、ついでなくて、親王の御琴の音の名高きもえ聞かぬぞかし。よきをりなるべし」と思ひつつ入りたまへば、琵琶の声の響きなりけり。黄鐘調に調べて、世の常の掻き合はせなれど、所からにや耳馴れぬ心地して、掻きかへす撥の音も、ものきよげにおもしろし。箏の琴、あはれになまめいたる声して、絶え絶え聞こゆ。

この場面は、八の宮の名高い琴の音を聞きたいと思っていたところに、姉妹が演奏する音楽が聞えてくる。場面bの自己の内面に分け入ったところに「極楽思ひやられて」と以前、話題で知っていた音楽が聞こえてくる状況になった。都にはない聖の地において、〈幻想的な美〉が薫の中に入ってくることになる。そのなかで薫は、これまでとくに関心のなかった恋愛関係につながる心から、姉妹を垣間見ることになる。このとき聞いた音楽は、薫の心に残り、八の宮へ次のように話している。

e【橋姫巻　一四八頁】

明け方近くなりぬらんと思ふほどに、ありししのめの思ひ出でられて、琴の音のあはれなることのついでつくり出でて、

（薫）「前のたび霧にまどはされはべりし曙に、いとめづらしき物の音、一声うけたまはりし残りなむ、なかなかにいといぶかしう、飽かず思うたまへらるる」など聞えたまふ。

右記の曙とは、場面bの時間を指す。雨の自然描写とともに姉妹の音楽の記憶が想起され、薫の心に強く残っている。垣間見のあとであるが、次のような薫の言葉がある。

f【椎本巻　一七三頁】

（薫）「すべて、まことに、しか思ひたまへ棄てたるけにやはべらむ、みづからの事にては、いかにもいかにも深う思ひ知る方のはべらぬを、げにはかなきことなれど、声にめづる心こそ背きがたきことにはべりけれ。さかしう聖だつ迦葉も、さればや、起ちて舞ひはべりけむ」など聞こえて、飽かず一声聞きし御琴の音を切にゆかしがりたまへば、うとうとしからぬはじめにもとや思すらむ、御みづからあなたに入りたまひて、切にそそのかしきこえたまふ。箏の琴をぞいとほのかに掻き鳴らしてやみたまひぬる。いとど、人のけはひも絶えてあはれなる空のけしき、所のさまに、わざとなき御遊びの心に入りてをかしうおぼゆれど、うちとけてもいかでかは弾き合はせたまはむ。

右記の「一声聞きし御琴の音」は、場面dのことを指す。宇治の自然環境と相俟って、姉妹の音楽は、薫の心に入り込んでくる。このようにして、後々まで、聴覚と感覚が強い記憶として残るなかで、薫は、垣間見で、姉妹の容貌を知ることとなる。

月光の下で垣間見る姉妹

姉の大君の容姿については、薫が垣間見る前に描写がある。姉の個性が描かれていて、この大君の長所は、後に妹の中の君よりも薫を惹きつける魅力として語られる。

g【橋姫巻　一一一頁～一一二頁】

容貌なむまことにいとうつくしう、ゆゆしきまでものしたまひける。姫君（大君）は、心ばせ静かによしある方にて、見る目もてなしも気高く心にくきさまぞしたまひける。いたはしくやむごとなき筋はまさりて、いづれをもさまざまに思ひかしづききこえたまへど、かなはぬこと多く、年月にそへて宮の内ものさびしくのみなりまさる。

大君は、この心の気高さで薫の愛情を引き寄せるのであるが、またそれゆえに情を拒む頑なさがあり、悲劇につながる。

h【橋姫巻　一三一頁～一三二頁】

あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押し開けて見たまへば、月をかしきほどに霧りわたれるをながめて、簾を短く捲き上げて、人々ゐたり。簀子に、いと寒げに、身細く萎えばめる童一人、同じさまなる大人などゐたり。内なる人、一人柱にすこしゐ隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつつゐたるに、雲隠れたりつる月のにはかにいと明かくさし出でたれば、（中の君）「扇ならで、これにしても月はまねきつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくらうたげにほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上にかたぶきかかりて、（大君）「入る日をかへす撥こそありけれ、さま異にも思ひおよびたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、いますこし重りかによしづきたり。（中の君）「およばずとも、これも月に離るるものかは」など、はかなきことをうちとけのたまひかはしたるけはひども、さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、必ずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむ、と憎く推しはかるるを、げにあはれなるものの隈ありぬべき世なりけりと、心移りぬべし。

霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。また、月さし出なんと思すほどに、奥の方より、「人おはす」と告げきこゆる人やあらむ、簾おろしてみな入りぬ。驚き顔にはあらず、なごやかにもてなしてやをら隠れぬるけはひども、衣の音もせずいとなよらかに心苦しくて、いみじうあてにみやびかなるをあはれと思ひたまふ。

月光の下、霧の深いなかで、幻想的な美が描写されている。精神的課題をかかえていた薫の心が動いてゆく場面でもある。

中の君の美と宇治の自然描写

匂宮は、八の宮の宇治の物語の反世界の人物であり、栄華権勢に支えられる皇統の人として、都の象徴とされる。中の君は、愛情のひたむきさが円満調和的な人物であり、色好みの美徳として顕現され、外発的、現代的と称される。

i【総角巻　二七一頁～二七二頁】

大宮の聞こえたまひしさまなど語りきこえたまひて、匂宮「思ひながらとだえあらむを、いかなるにか、と思すな。夢にてもおろかならむに、かくまでも参り来まじきを、心のほどやいかがと疑ひて思ひ乱れたまはむが心苦しさに、身を棄ててなむ。常にかくはえまどひ歩かじ。さるべきさまにて、近く渡したてまつらむ」といと深く聞こえたまへど、絶え間あるべく思さるらむは、音に聞きし御心のほどしるきにや、と心おかれて、わが御ありさまから、さまざま

もの嘆かしくてなむありける。

明けゆくほどの空に、妻戸おし開けたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば、霧りわたれるさま、所がらのあはれ多くそひて、例の、柴積む舟のかすかに行きかふ跡の白波、目馴れずもある住まひのさまかなと、色なる御心にはをかしく思しなさる。山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御容貌のまほにうつくしげにて、限りなくいつきすゑたらむ姫宮もかばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの、わが方ざまのいといつくしきぞかし、こまやかなるにほひなど、うちとけて見まほしく、なかなかなる心地す。水の音なひなつかしからず、宇治橋のいともの古りて見えわたさるるなど、霧晴れゆけば、いとど荒ましき岸のわたりを、匂宮「かかる所にいかで年を経たまふらむ」など、うち涙ぐまれたまへるを、いと恥づかしと聞きたまふ。

匂宮は、大宮の諫言や高貴な身分のため、社会的制約があり、軽々しい外出はできない境遇にある。我心からではないと中の君に伝え、「身を棄ててなむ」、と近くに引っ越してもらうなど、行動で示している。中の君の反応は、「音に聞こえし御心」と浮気心を用心し、「わが御ありさま」と身分差を意識しているが、中の君の現代的な明るさで信じて、今後を待つことになる。

中の君の美と宇治の自然描写についてであるが、「例の柴積む舟のかすかに行きかふ跡の白波」の引歌は、「世の中に何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟のあとの白波」（拾遺集巻二十哀傷歌　沙弥満誓）「世の中を何に喩へむ朝開き漕ぎ去にし舟の跡なきがごとし」（万葉集巻三）であり、沙弥満誓は、俗名笠朝臣麻呂、養老七年筑紫観世音寺別当となり、大宰府へ行く。神亀五年頃、師として下った大伴旅人と交流があった。この「舟の跡なきがごとし」は実景であろう。沙弥満誓の和歌は、世の無常を引き出しているが、ここでは、世の無常と観じる構えではない、宇治の自然環境そのものがもつ風情、荒れた風情に、愛する女性と我が身を感傷的に受け取っている。玉上評釈(3)によると、匂宮の持つ、「限りなく情に感じやすい心」「感情的」「多情な心」と解釈されている。これに対して、薫は、「柴積む舟」に対して、「誰も思へば同じ如なる世の常なさなり。われは浮かばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かは」と、無常を感じている。

また、中の君の容貌について、匂宮は、女一の宮との比較をし、中の君の美しさに陶酔している。中の君の美しさに心打たれた後、水の音で、宇治のこれまでの中の君の環境を思う。人間の心情と状況とを内側と外側双方のけじめをおかず、同時に総体的にかたどってゆく表現方法である内話が用いられている。宇治の自然環境の描写とともに、匂宮の陶酔感情は更に高まってゆく。匂宮と中の君との恋愛関係にみられるように、身分差や都との環境の決定的な違いがある。主人公薫と姉妹の人間関係も同様で、恋愛感情、身分差、環境の違いが複雑に心情と相互の関係に影響している。

薫と栄華

j【椎本巻　一九〇頁～一九一頁】

薫「いはけなかりしほどに故院に後れたてまつりて、いみじう悲しきものは世なりけり、と思ひ知りにしかば、人となりゆく齢にそへて、官位、世の中のにほひも何ともなんともおぼえずなん。

弁と対面した薫は、栄華を追求していない自らの心を語る。薫は、出生の秘密を話した弁にこれまでの自己の感慨を語る。薫の人間関係については、これまで考察されてきている。

秋山虔氏は、「美徳がある状況、ある場面において、どのような人間的意味をもっているか」「構成される人間関係のからみ合いにおいて、かれの諸々の特性がいかに相対的複雑多様に顕現」「生きた統一的性格」

(4)と指摘なさっている。

野口元大氏は、宇治の物語について、危機的状況における人間のありかたを描いているとされている。「宇治の大君のケースは、すでに多くの論者によって認められているような、愛しながら人間の愛の恒常性・永遠性を信ずることができない女の悲劇である。彼女は薫と魂の交流を感じ、それを貴重に思えば思うほど、その必然的な変易を怖れるあまり、それに没入することを自分に許せない。肉身をゆだねることを拒否することによってその愛を非日常化し、その極点における死をもってそのすがたを永久に氷結しようとしたのであった。（中略、蛍巻の物語論を引用なさって）つまり、虚構を方法とすることによって、作者は、自由な想像を駆って、日常世界ではきわめて稀な機会に閃光的に垣間見ることしかできぬ人間性の深奥のすがたを、つぶさに解析的に見きわめることもできるわけであるし、ある場合には、現実では疎外され解体されてしまった人間主体の恢復を、物語の中で実現することさえ可能とされるのである。」と指摘なさっている。(5)

青年期における精神性の高さ

光源氏という人物の人生を通して、栄華とその凋落という主題の後、第三部では、別の主題が描かれる。都（俗）に対して宇治（聖）という設定により、政治的抗争等の人間関係は希薄化し、薫は、自己の精神的課題と向き合うことになる。霧でふさがり、道もみえないという、薫が宇治に分け入るときの自然描写は、薫の自己の内面を表現し、自らの意思で困難なものを追求する心情と一致している。場面描写が、独詠歌に向かって収斂し、薫の精神的探求の始まりとなっている。

そして、八の宮から姉妹に授けられた音楽は、都にはない聖の地において、「極楽のやうな美」として、薫の中に記憶される。月光の下、霧の深いなかで、幻想的な美が描写されている。精神的探求に動きが出てくる場面でもある。

都の象徴の匂宮と聖の世界に入ってゆく薫との宇治の自然に対する感覚の違いは、精神性の違いでもある。第三部の宇治の自然描写と薫の心情について、薫の道心、薫の独詠歌の場面、八の宮から姉妹へ継承された音楽、姉妹の描写を中心に考察を述べてきた。

第三部の主人公である薫は、第一部第二部の主人公光源氏とは違って、身分や地位など、都で栄華を手に入れている人物であるが、心に空虚さ、精神的課題を抱えており、道心を求めて、宇治に向かう。橋姫巻の場面では、雨の中、茂木を分けて、自分の求めているものを探しながら、幻想的な月光のなかで、極楽のような音楽とともに姉妹に出会う。俗である都では描けない、聖なる宇治における主題を描いている。宇治の自然環境の描写が、薫の心情表現と関連し、感覚的に表現している。悩みを抱え、道心を持つ青年期の薫の精神性の高さが描かれ、それは、聖なる宇治での精神的探求であったということが考えられる。

注

(1) 本文の引用は全て、『日本古典文学全集 源氏物語　五』による。校注　阿部秋生氏・秋山虔氏・今井源衛氏 小学館 昭和五十年五月三十一日　なお、本文中の傍線・かっこ書きは、論文執筆者によるものである。

(2) 竹内美智子氏『平安時代和文の研究』三四〇頁　昭和六十一年五月二十日　明治書院

(3) 玉上琢也氏『源氏物語評釈　総角巻』角川書店　一九八〇年

(4) 秋山虔氏　「薫大将の人間像」『源氏物語の世界』東京大学出版会　一九八二年

(5) 野口元大氏　「源氏物語の道程」『王朝仮名文学論攷』風間書房　二〇〇二年

（二〇〇六年十月三十日 受稿）

On the description of nature and the feeling of *Kaoru*, the hero in the *Tale of Genji*, to *Uji*

Shibamura, Saori

Abstract

The author researches a visit made by *Kaoru*, the hero in the *Tale of Genji, to Uji*, a suburb of Kyoto. This paper analyses;1) the differences in the atmosphere of *Uji* and *Kyoto*. 2) the interaction between *Kaoru* and the beautiful sisters he meets when hearing heavenly music, and 3) the effect of this encounter on the mind of the hero himself.